
パンセ

おでき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パンセ

【Nコード】
N9727L

【作者名】
おでき

【あらすじ】
花たち喋る、語る、哲学する。

月毎に顔が変わるのもままある場所に根を下ろして半年、この一面では古株の私はようやく同類を迎えた。草木の芽吹く春、初めて自分に似た顔の仲間を得たのだ。

似ているといっても姿かたちだけで、色は全く違った。新しく隣に來たのは、冬に降る結晶のような雪色の子と、星を散りばめた夜を思わせる、濃い空色の子だった。私はその新入り達に、勝手に名前をつけた。雪色はビオラ、空色はトリコールと。けれど面と向かって呼ぶことはせず、心の中で呼ぶにとどめた。

新緑の匂いが風に乗って届く頃には、私たちはよく話をする仲になっていた。すると、互いに違った特性の持ち主であることも分かった。ビオラは臆病なのに好奇心旺盛で、トリコールは物怖じせず聡明であった。

ビオラは優しい口調に乗せて、その場で思ったことを何でも素直に伝えてくれ、聞いていると穏やかな気持ちになれる。一方トリコールは話を聞いて賛同するだけでなく、別の見方を与えてくれたりした。特に、トリコールの知識には驚かされるものがあつた。惜しげもなく知見を披露する姿は、ビオラと私を夢中にさせた。

この日もトリコールは興味深い話をしてくれた。「名前」についてだ。ヒトの世界では、モノを区別するために種類としての名が冠されており、そこから更に詳しく固有の名がある、という話だった。「僕らがヒトに何て呼ばれているのか知っている？」

知らない、と言ったビオラと私にトリコールは教えてくれた。

「パンジー、サンシキスマイレって言うんだよ」

トリコールが言うには、私たちは「ハナ」という種類で「パンジー」あるいは「サンシキスマイレ」という固有の名があるらしかった。パンジー、パンジーと何度も呟いているビオラの横で、私はトリコールに先を促した。トリコールは言う。

「情が移れば、ヒトは更に個人的に名前をつける」

「どういう意味？」

興味津々の私にトリコールは説明してくれた。

「ヒトにもそれぞれ名前があるだろう？ 昨日水をやった子は『ミ

カ』、一昨日やった子は『リカ』っていう名があった」

「そう言えばそうね、同じヒトでも違う名があるわね」

私は、「ミカ」と「リカ」が互いに呼び合っているのを何度か目撃していたことを思い出した。

「ひとくくりにすると呼ぶ時に呼べないから。だからヒトの間では『ミカ』と『リカ』は違うヒトとして区別している」

そこでやっとパンジーの連呼を止めたビオラが言った。

「名がいっぱいでヒトは困らないのかしら。だってそんなにあると覚えきれないわ、きつと」

ポツリとそんな感想を漏らしたビオラに、トリコールは屈託ない笑い声を上げた。

「そうだね、でも考えてごらんよ。よく、毛むくじらの奴が来るだろう」

「ああ、あの子ね？」

「あいつはイヌって種類で、その中のチワワってやつだ。おまけにヒトから特別な、そいつだけの名を貰っているよ」

うん？ と問いかけ気味の口調のビオラに、トリコールはこたえた。

「ココって名だ」

「それがあの子だけの名なの？」

「そう、あいつを呼ぶための名だよ。そうじゃないと、逆に困るんだ。他のイヌと区別できない」

「イヌってそんなにいっぱいいるの？ それにどうして区別しなくちゃいけないの？」

最初の質問はともかくとして、二つ目に言ったビオラの疑問はもっともだと同感した。

「いっぱいの中からココは取り出されたんだ、ココと名づけたヒトに。そのヒトが他のイヌと区別したかったから、ココはココなんだよ」

「……よく、分からないわ」

納得いかない様子でゆっくりと紡ぐビオラにトリコールは、僕もと笑っていた。

「でもね。ひとつ言えるならココは特別なんだよ、ココと名づけた人にとっては」

「特別……」

ビオラはその言葉を、幾度となく呟き始めた。

思い当たる節のある私は、内心考えていた。ビオラという名前と、トリコールという名前を目の前の子たちに付けていた。よくよく考えればなるほど、トリコールの言った通り、私はこの子たちを他のモノと区別しなかったのかもしれない。どうしてその名にしたのかは分からないけれど、ふと浮かんだのだ。

私はどうやらヒトと同じ真似事をしていたらしい。なのに、驚くことなくすんなりと腑に落ちていた。それどころか不思議な感慨を抱いていた。

二

「どうしてそんなことまで知っているの？」

詳しく知識を並べるトリコールに、ビオラは興味津々といったふうに問いを示した。

それはヒトの歴史についてであった。ヒトがどういうふうに生活をし、ここまで上り詰めて自然界に存在しているのかを、トリコールは冗長かと思えるほど渾渾こんこんと話してくれた。しかしその話には随所に驚きが施されていたのである。結果、トリコールはなぜヒトをそこまで知り得ているのだろうと疑問を抱き、また少しばかりの気味悪さを覚えた。あまりに知りすぎているのは、かえって怖く感じてしまう。それを知る由もないトリコールはあっけらかんと、ビオラの質問に答えた。

「僕は昔、ヒトだったからさ」

その言葉にビオラと私は哑然とした。いよいよ気味が悪くなる。ヒトとハナの種子は違う。いつから同じ品種になったというのだろうか。

「よしてよ。今までで最高にセンスのない答えだわ」

私の言葉にトリコールはクスリと笑った。

「センスか、君は面白いな」

「ねえ話を戻して、続きが聞きたいわ」

そう言ったビオラは風にそよぐ自身を気に留める事なく、揺ら揺らとカラダをくねらせていた。

「僕はね、ヒトとしての人生に悲観したんだ。だから神様をお願いして、次に生まれた時は自然界に近い命にして欲しい……と、ずっと願っていた。そして今、ご覧の通りということ」

カミサマという概念はついこのあいだ知った。トリコールが言うには、カミサマというのはシュウキョウというヒトが信じる考え方の頂点にいる存在で、色んなシュウキョウに合わせて色んなカミサ

マがいるらしい。そして中には、望みを叶えるという不可思議なカミサマもいるのだという。ヒトの間でも信じる側と信じない側がいるらしいが、トリコールはどうやら前者であったのかもしれない。「それでこうしてパンジーになったって言うの？」

覚えたてのパンジーという言葉を使って尋ねるビオラに、「そうだよ」とトリコールはいとも簡単に肯定した。その呆気なさにビオラは腑に落ちない声音で漏らした。

「そうしたら、あなた損しているじゃない」

「どこが」

「ヒトのほうが優位なのに」

私もそれには同調した。ビオラの言いたいことは分かる。なぜ、わざわざ花になったのか。

しかしトリコールは答えをくれなかった。

「圧倒的に他の命を掌握する権利は、確かに僕らより持っているね」
シニカルな口調でそう言うトリコールに私は真下の地面を見た。

僕らより、ですって？

私は思わず言い返す。

「比にならないわよ」

この分では水がもたない。土が乾く前に誰か帰ってきて欲しい。私たちは自身の足元ですら、思うようにいかないのだ。欲求の解決すらままならない。すべての決定権はヒトにあり、私たちはそれを握られている側なのだ。

私の言葉にビオラとトリコールは黙ってしまった。しかし俯き加減の私に、しばらくして期待に満ちた声が届く。この類いの勘はビオラがずば抜けていた。

「雨が降りそう」

呟いたビオラに、安堵した。これで数日は助かる。

深く馨しい薫りが雨期の前兆を告げている。じきに湿った空気が周囲を包みこんで、そのまま雨の季節が来るだろう。そしてそれが

明ければ照りつける太陽の登場だ。それは経験していなくとも、何となく分かっていた。きつとトリコールの言うホンノウというものだ。

今年は暑くなるのもあつという間らしい。私たちにそれを教えてくれたのは天敵である、どこへでも好きに移動できる生き物だった。それはヒトの間ではチョウと呼ばれるものだった。そのチョウが近付いて、私たちの前にふわりと降り立つ。内心焦ったがチョウはそんなこともすぐに見破ったらしく、フフと奇妙な笑いをして優雅な口調で言った。

「安心なさいよ、あなた達なんかいらないの」

そう言ってチョウは私たちの頭上を旋回し始めた。何だかとても癪に障ったが、ムツとすればそれは、チョウの思う壺のような気がしたので黙っている。

「お腹がいっぱいなよね、今は……」

今は、を殊更に強調するチョウに一抹の不安を覚えたが、それよりもビオラの様子が気になった。とても怯えて恐ろしげにしている。そんなビオラの様子も上から見下ろすチョウは分かっているのか、フンと笑って楽しげに言った。

「もうすぐ暑い日が来るわよ、今年は早い。雨露も少ないでしょ？」
何が愉快なのか、ヒラヒラとしきりに鮮やかな模様の翅を見せびらかすように私たちの上を飛び跳ねている。

「ああ、楽しみねえ、とても楽しみ。フフッ……またね？」

言うだけ言ってチョウはひらりと上空に舞い上がって行った。

「楽しいことなどあるものか」

チョウの目の前では挑発に乗らなかったトリコールは、チョウが消えてから不機嫌な口調で呟いていた。私も、チョウが何をもって楽しいと言ったのか理解に苦しむ。しかしそれよりも、またね、と言ったことのほうが苦しみは数倍だった。それに悔しかった。

きつと次に会った時には、チョウは別の顔でやって来るだろう。そして私たちの前でこう言うのだ。あの優雅な口調に似合った捕食

者の顔で。

——ああ、お腹がすいたわ、と。

三

気ままな天敵が去ってから、眩しい太陽と明るい月を同じ数だけ跨いで十数回。あの忌々しいチョウの言葉通り、すぐに暑い空気が訪れ、私たちを襲っていた。それでも夜の間は過ごしやすい、日中さえやり過ごせば太陽の見えなくなる頃には、気持ちのいい風が微笑んでくれる。それも楽しみの一つであったが、最近私にはもう一つ楽しい出来事が増えていた。周囲の寝静まった頃、トリコールとよく話をするようになっていたのだ。静かな眠り時はもちろんピアノも例外ではなく、微動だにしないでカラダを休めている。そのビオラの横で、私はトリコールと夜な夜な会話をしていた。いつしか夜が待ち遠しいと、思うようになっていたほどに。

今夜も私は、トリコールの話に夢中になって相槌を打っていた。

「パンジーってね、パンセという言葉から名づけられたんだよ」

「パンセ？」

聞いた事のない新しい言葉だった。私はパンセの意味を尋ねた。

「思考、思索、思想」

トリコールはつらつらと答えていった。

「これから今よりもっと暑くなる時期に、僕らはこの花卉を前に傾げるんだよ。その格好がヒトの思索に耽る様子に似ていてさ、だからパンセという言葉から名づけられた」

「へえ……」

最近では、トリコールを気味悪いとは思わなくなっていた。きつと昔はヒトであったと話したあの会話を受け止めたからだろう。もう、その物知り具合に素直に感心するばかりだ。

「暑いのは苦しいけれど、少しでも楽しみたいだね」

そう言ってトリコールは笑う。

「みんなで見よう」

力強い言葉を吐いたトリコールに、私は「うん」と返事した。

「君ね、似ているんだよ、僕に」

トリコールがそう言ったのは最も暑い時期が到来する直前、もはや私たちの日課となった夜の会話の最中だった。

「そう」

どこらへんが、と思った私は、きっとそう思うところが似ているのだろうと感じた。もしこれがビオラなら色も形も大きさも違うと否定しているだろうから。

「ひょっとして、君も昔はヒトだったのかも知れないね」

トリコールの予想に私は不思議と納得していた。いつかトリコールが、私の言ったセンスという言葉に面白いと返してくれたことを思い出す。なぜ私はそんな言葉を知っていたのだろう。考えれば考えるほどトリコールの言ったとおりのような気がして、私はぼつりと皮肉を返した。

「だからあなたの事、好きになれないのかしら」

トリコールは「言うね」と花卉を揺らしていた。

「同族嫌悪、なのかも」

私の呟きにすかさずトリコールは言葉を挟む。

「似ていない所もあるよ」

どこかしら、とトリコールを見やると、トリコールは歌うように呟いた。

「君は可憐だろう？」

「……確かに、似ていないわね」

素直に礼を言えない私に、トリコールはしかし嬉しげな声で笑っていた。トリコールと私は、こういう会話を交わせるくらいになっていた。それは思いのほか居心地が良く、私に不思議なことを願わせた。

ずっと続けばいい、と。よく知らないカミサマという存在に。

こんなことを考える私は、余程センスが無いのだろうか。

この日、ミカとリカは連れ立って私たちの前に現われた。他に水をやるヒトと比べると小さな二人だけれど、それでも私たちには圧倒的な大きさに見える。朝から姿を見せた二人に私たちは適度な水分を与えられた。

今日の分の補給を終えると、水滴を浴びてキラキラと光る周囲や土の喜びを感じていた。ビオラもトリコールも嬉しそうにしている。辺りに注意をやると、他の草木たちも同様だった。気持ちいいね、気持ちいいねと、さんざめく声が共鳴している。

私もその声に肯いて、再度ビオラとトリコールを見やった。しかしその時、信じがたい光景が飛び込んでくる。

……トリコールがいない。

今しがたまで一緒にいたトリコールは何故か忽然と姿を消していた。トリコールがいたはずの場所には、先程の水の名残で湿った土が若干荒れている。土の散らかり様に私は瞬時に理解した。掘り返されたのだ。

慌てて周囲を見てみると先程の騒ぎ方とは打って変わって、みながざわついている。ビオラの困惑しながらも注意をひくような大きな声に、私はビオラが声で示した先を見た。……息を、呑んだ。

——確かに、名とは便利なものだとは分かった。名があればトリコールの言った区別が容易に出来る。トリコールを摘んだのは、ミカのほうだと私は記憶に刻み込んでいけるのだから。

「泣かないで、泣かないで」

私は、しきりに声を震わすビオラにその言葉ばかりをかけていた。その言い方がおかしいとは思わなかった。本来ハナであるなら、涙というものは流せない。泣けないくせに、「泣かないで」と自然と連呼していた。

それから二日、ビオラは慰めてもウンウンと頷くだけで、一向に元気にならない。私も氣落ちしたままだったけれど、これも仕方の

ないことだと自分を納得させていた。何故ならすべての決定権はヒトにあり、私たちはそれを握られている側であるからだ。これはやはりはどうしようもない。叫んでも喚いても、私たちはヒトの意思には逆らえない。トリコールのことは心配だし不安だけれど、どうにもならないのだ。ただ、私は忘れないでおこうと思った。トリコールと、ミカのことを。

七日も経つと、徐々にビオラは元気になっていった。私もビオラもトリコールの心配はするけれど、そればかりに構っていられるわけではないからだ。

朝も昼も夜も一日中、暑い日々がやって来る。

生き残るために、この暑さを耐えねばならない。ビオラはビオラのことを、私は私のことを、自分自身の身だけを案じ、次にいのちを残すことが絶対だからだ。

トリコールがいなくなってからというもの、私たちはミカとリカの行動にいちいち怯えていたが、どちらも私たちにただ淡々と水をやる日々が続いていた。土中にたっぷり含まれていく水分は暑さのおかげで少々物足りなく感じていたが、水分の取り合いは一株分だけ浮いたのだ、安定した世話が欲しいけれど贅沢は言えなかった。

四

「大丈夫なの？」

ビオラはいつになく疲れきっている私に、声をかけてくれた。

「平気よ」

私の声にビオラはしょんぼりしながらも、「そう」とだけ返す。

私はここ最近、グツタリとしていた。暑さのせいで弱りきり、私自身、不安を覚えていた。言葉にするのも恐ろしいが、このままでは最悪の方向へ転がるのは目に見えている。イヤだイヤだと思っても、私のカラダは言うことを聞いてくれない。

……枯れてしまう。私は、まだここにいたいのに。

「だから明日でしょー、明日、明日！」

賑やかな声が聞こえた。こうして昼夜問わずぼうつとする日が続いて、果たして今日は何日めだったろうか。それすら思い出せない朦朧とする意識に元気な声がぶつかってくる。頼りない思考を巡らせて、これはどちらの声かと記憶を辿るとすぐに答えが出た。

ああ、ミカのほうね。忘れもしないミカ。あらあら、今日はどうしたの、ミカ。リカも連れ立って。水は朝方に頂きましたよ。

私はいつかのチョウが見せたような、奇妙な笑いが自分の中から込み上げてくるのが分かった。その様子を心配そうにしながら、訝しげにビオラが眺めているのも見える。

ビオラ、大丈夫よ、私は——そう言いたいけれど、あまりに気力が無くて言えなかった。

「ふーん、明日なの？」

「そうだよ！」

どんどん大きくなる声に、二人が近付いてくるのがわかる。その

途端、私は頭上が暗くなったのを感じた。大きな影は私だけでなく、ビオラや周囲の子たちも覆っているようだ。ミカとリカが覗き込んでいるのね、と判断した矢先、私は一気に不思議な感覚に囚われた。こんなの初めてだった。カラダが浮いている。私、翅がある種類のものではなかったはずなのだけど、おかしいわね。そう思っているとカラダの一部分が痛んだ。どうやらギュッと掴まれているようだ。私を持っているのはどちらかしら、と思案しているとビオラが下に見える。慣れ親しんだ一画を私は見下ろしていた。その中にいるビオラに、私は新たな感想を持った。

あなた、こんなに小さかったのね。上から見ると綺麗な雪色。今は暑いから、あなたの色を見ただけで気持ちよくなれるわ、と。

この一画にしてもそうだった。今まで居た所なのに見方ひとつでこんなにも違うものかと、感心する。けれど感動の時間を邪魔する力が、カラダに加わった。

痛い、と思った瞬間、また見えるものが変わった。私は何かに放り込まれたらしい。そこに落ちていく間際、ビオラの声ははっきりと聞こえた。

「いやー！」

……ああ、ビオラ、ビオラ。泣かないで？

どうやら私は真っ暗な所に入れられたようだ。真っ暗といっても上の方からチラリと光が差し込んでいるけれど。でも日当たりの悪い場所に移動させられたのは確かだ。ここに私を入れたのはミカなのかリカなのか分からない。しかし今はそんなことすらどうでもいいように思えた。それよりも気になったことがある。ここは色々な臭いがしているのだ。

おまけに、たくさんの子がいるみたいだ。私が来た時にはみな既にいたようなので、ここでは私は新入りなのだろう。暗がりだけれど、何となく私の周りにあるものの形は分かる。私は観察を試みた。まずは……と、そばにいる子をじっと見てみた。

その子は、先程まで私のいた一角の向こうにある、別の一画の子だと分かった。ヒトの食料になる、確かニンジンという名の上の草の部分。それから他に知るものがないか、注意深く観察していると、近しい子を発見した。私は少しだけ気分が上向きになっていく……あ、この子知っているわ、少し姿が変わってしまったているけれど。前はもっと草色をしていたのに、どうしたのかしら。

それは近くの、土の入った大きな器に並んでいた子だった。私たちの天敵のチョウですら忌み嫌っていた子で、トリコールが教えてくれた。ハーブという種類のパセリという名だったと思う。

周囲を確認していると、「それにしても」と訝しんだ。

……みんな酷いありさまね。カラダがボロボロじゃないの。ああ、でも私も同じかしらね。

冷静に観察していると、上から感じていたわずかな光が途絶えようとしていた。

あ、太陽が消える——そう思った瞬間、上からの光が閉ざされて、私はこの子たちと一緒に夜より暗い場所に完全に閉じ込められた。

戸惑う暇もなく、次にギュッとカラダが圧迫されていく苦しさが襲ってくる。何やら外から押し潰されているらしい。その感覚に恐怖した。窮屈だ、とても窮屈になっていく。場所がせばまって、揉みくちやにされる。もう動けない。閉じ込められたのだ。

みんな、みんな、と私が周りの子たちに注意を寄せても何の声も聞こえてこない。返答のない空しさに直面した時、この子たちが私と同様、ボロボロのカラダであったのを思い出して、愕然とした。

私の声に応えないのは意地悪をしているからではない。声が出ない、いや、もう出せないのだろう。私より少し先に、声が出なくなってしまった子たち。その中に私はいる。その事実が示すものは明白だ。

……これはもう抗えない事態なのだ、と理解した。私は諦めてカラダを休ませることにした。

もうすぐ、私もこの子たちと同じ様になるのだろう。

その事実を受け止めると、閉じ込められた暗がりの中から、かうじて外の声を聞き取った。

「ミカちゃん、リカちゃん、燃えるゴミの日は明日じゃなくて、明後日よー」

私もカミサマにお願いをしてみよう。

次に生まれたら、また、ビオラとトリコールに会いたいもの。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9727/>

パンセ

2011年5月24日21時10分発行